P03

『医学図書館』誌をつくってきた人々

－執筆者と編集委員の分析を通して－

城山泰彦
順天堂大学図書館

Ⅰ．【はじめに】

NPO 法人日本医学図書館協会の機関誌『医学図書館』は，2006 年で 53 巻を数える雑誌です。筆者は 2002 年 7 月から 2006 年 5 月まで『医学図書館』編集委員を経験して，執筆者と編集委員が，一部の加盟館に偏っている印象を持ちました。『医学図書館』誌が協会機関誌として多くの読者に支えられていくためには，加盟館員をはじめとする幅広い執筆者の確保や，多様な考えを持った編集委員が参画することが不可欠と感じています。

今回の調査では，執筆者と編集委員の分析などを通して，本誌の置かれている現状を鑑みることを目的としました。

Ⅱ．【調査方法・調査項目】

『医学図書館』創刊号（1954 年 1 月発行）から調査時点の最新号 53 巻 1 号（2006 年 3 月発行）までの，218 号を調査対象としました。そして執筆者（editorial や加盟館員外の執筆などを除いた約 2,800 題)と編集委員について，機関・館種別の傾向，時期的な傾向などを調査しました。また加盟館職員数の推移について，『NPO 日本医学図書館協会加盟館統計』の第 61 次（平成元年度：1990 年）から第 76 次（平成 17 年度：2005 年）により調査しました。

Ⅲ．【調査結果】

およそ半世紀にわたる『医学図書館』誌の歴史の中では，関東地区の（比較的職員数の多い）私立医科大学によって支えられている結果となりました。時期によって多少の変動はありましたが，近年は特に，この傾向が強い印象を受けました。

また，2005 年の加盟館の専任職員数は，1990 年のおよそ 80%にまで減少していました。近年の変化の大きな業務内容などを考えると，図書館員が日常業務で忙殺されている様子が伺えます。このことからも，執筆者を確保することが難しいうえ，編集委員のなり手の確保については，それ以上に悩ましい状態となっています。

2006 年 6 月からは，これまで関東地区の医学図書館・病院図書室から選出されていた編集委員を，東海地区，近畿地区，個人会員，医学図書館以外の加盟館からも選出することになりました。幅広い館種の加盟館や個人会員，ひいては加盟館外からの多様な考えの編集委員が集まることによって，本誌の発展につなげられればと願っています。

そして，今回の調査により明らかになった点を踏まえて，本誌のこれまでの傾向と，予想される今後の傾向について考えていきたいと思います。